

犬や猫にもやさしいまちづくりを ～犬・猫殺処分ゼロへの挑戦～

千葉市議会議員 亀井 琢磨



■減少傾向にあるも依然として多い殺処分

環境省によれば、平成28年度、全国で殺処分された犬・猫の数は55,998匹（犬10,424匹、猫45,574匹）にのぼります(図表1)。かつては年間100万匹が殺処分されていた時代と比較すると、大きく減少傾向にありますが、それでもまだ5万匹を超える尊い命が奪われています。こうした事態に心を痛め、少しでもなんとかならないだろうかと思っている住民はたくさんおり、かくいう私もそのひとりです。こどもの時から、捨て猫や野良犬の存在に心を痛め、隠れてエサを与え、時に拾って育ててきましたが、ある夏の日、生後間もない仔猫を保護したものの、家の事情により、どうしても飼うことができず、私は泣く泣くその仔猫を元



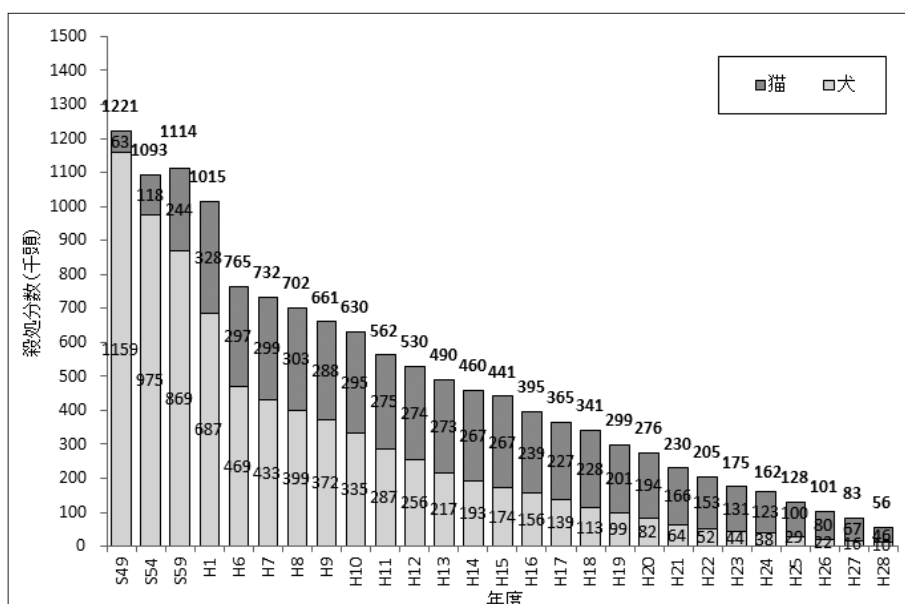
収容されている犬

の場所に置き去りにせざるを得ませんでした。幼な心に動物を見殺しにしてしまったその出来事は今も鮮明に胸に突き刺さり、私の背中に十字架として重くのしかかっています。

私と同様の体験をしたり、不幸な犬や猫の存在を目にしてしまったがゆえに胸を痛めている人は全国にたくさんおり、そうした方々の中には、動物

たちのために個人ボランティアとして、あるいは愛護団体・サークルに参加して愛護活動を行っている方もおられます。そうした多くの方々の尽力によって、命を落とす寸前だった犬・猫たちが救い出され、殺処分数も着実に減少傾向にありますが、そのスピードをさらに加速させなければなりません。そんな思いから、平成23年の当選以来、年に1～2回のペースで継続的に「動物愛護施策の推進」につ

図表1 全国で殺処分された犬・猫の数の推移



いて、一般質問の取り組みを続けています。以下、千葉市の取り組みを紹介します。

■県内・市内の犬・猫の現状と これまでの取り組み・課題



収容されている猫

千葉県ではかつては多くの殺処分が行われ、「殺処分ワースト県」に位置付けられていました。平成18年度13,594匹（犬5,843匹、猫7,751匹）➡平成28年度1,152匹（犬181匹、猫971匹）と近年大きく減少傾向にありますが、依然として多数の殺処分が行われています。全県の各自治体でのさらなる取り組みが求められています（※平成18年度は千葉、船橋を除く数値、平成28年度は千葉、船橋、柏を除く数値。ともにセンター内での病死等も含む数値）。

千葉市においても、かつては大量の野良犬・野良猫がセンターに収容され、そのまま殺処分が行われてきましたが、この間、多くのボランティアの尽力や行政との協働により、平成27年度より、「殺処分ゼロ」を達成し、困難を抱えつつも、現

在も「ゼロ」を継続しています（図表2）。

ここでは、紙面の都合から、この間の取り組みとして大きく3点、そして「殺処分ゼロ実現」から「さらなる動物愛護の推進」に向けた今後の課題として大きく5点を挙げたいと思います。

■この間の取り組み

①収容される不幸な犬・猫を減らすこと

殺処分を減らすには、収容される犬・猫自体を減らさねばなりません。飼い主等からの安易な引き取りの拒否・指導はもちろんですが、野良犬・野良猫を増やさない取り組みが必要です。千葉市では現在、「飼い主のいない猫（野良猫）の不妊去勢手術事業」（年間約300匹）を実施しています。これは、地域の野良猫を保護・ケアすることを条件に無料で不妊去勢手術を行うもので、年2回の申し込みには応募が殺到するほど、市民やボランティアにも大変好評です。市内のある地区では、無責任な餌やりによって野良猫が急増しましたが、この事業を活用することで頭数の抑制に成功しました。

そもそも驚くような話ですが、猫は年4回出産し、1度に3～8匹のこどもが産まれます。その猫たちがまた出産を繰り返すことで、計算上、1匹の猫が1年で240匹にもなってしまうと言われています。ですから、オス・メスを問わず、早期に不妊去勢手術を施すことで、不幸な猫を減らしていくことが求められているのです。

図表2 犬・猫のセンターでの死亡数と殺処分数（千葉市）

項 目		H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
犬	センターでの死亡数	266	272	161	62	38	24	20	4	3	1	2
	うち、殺処分数	—	—	—	—	27	15	11	1	1	0	0
猫	センターでの死亡数	1,249	1,111	1,027	757	560	304	349	236	57	68	51
	うち、殺処分数	—	—	—	—	258	92	127	143	1	0	0

②収容された犬・猫を新しい飼い主につなげること

収容された犬・猫は譲渡につながなければ殺処分となってしまいます。ボランティアの方々は、「収容された犬や猫を自ら引き取って世話をしたり、新たな飼い主への譲渡につなげていく役割」を果たしています。具体的には、地域における「譲渡会」の開催、ホームページ・SNSでの情報発信、収容された犬・猫のケア、乳飲み子である仔猫のミルクボランティアなどが挙げられます。ミルクボランティアとは、生まれて間もない乳飲み子の仔猫への授乳をするボランティアであり、生まれて間もない仔猫はそれまでセンターでも対応が難しく、そのまま殺処分となっていました。このミルクボランティアの導入により、殺処分を回避できるようになり、大きな効果を挙げています。また、センター主催の譲渡会は平日に年間19回開催され、新たな飼い主への譲渡につながっていますが、開催回数の増や土日開催など、さらなる工夫を求めています。

③「地域猫」をはじめ、地域における理解を進めること

現在、野良猫に不妊去勢手術を施したうえで、再び地域に解放し、その寿命を全うさせようという「地域猫」活動も活発になっています。これにより、繁殖を抑制し、頭数を適切に管理しようとするものです。しかし、地域には「動物が好



地域猫活動を行っている筆者

き」「動物が嫌い」と考えが全く異なる住民が生活しています。嫌いな人は、「庭を荒らす」「糞をする」ということで、「とにかくいなくなしてほしい」と考えています。そういう中で、いかに丁寧に話をし、理解を得ていくかが重要です。私もやがては頭数が減少するという実証を示しながら、頭を下げ続けていますが、粘り強い取り組みを通じて、理解や協力をしてくれる地区も生まれています。「動物愛護施策」は、「好きな人のためにもなるし、嫌いな人のためにもなる」という観点での活動が大切です。

■今後の課題

①県内の殺処分数を減らし、ゼロを目指すこと

千葉県では殺処分ゼロを達成しましたが、千葉県全体ではまだ厳しい現実があります。県内各自治体の野良犬・野良猫は県の愛護センター等（千葉、船橋、柏は独自のセンター）に収容され、日々殺処分されています。どうかこの現実を知っていただき、それぞれの自治体レベルから、この実態を取り上げ、殺処分を減らす取り組みを構築していただきたいと思います。

②飼い主・ペットの高齢化等による飼育放棄問題・多頭飼育問題

飼い主・ペットの高齢化・長寿命化が進む中で、飼い主の突然の死亡・入院により、ペットの飼育継続が困難となるケースが顕在化しています。千葉県でもそのような飼育放棄による収容が増加するとともに、また、昨今では多頭飼育問題も発生し、市内で50匹を超える猫の多頭飼育崩壊事例が報告されています。独り暮らしの高齢者や生活困窮者が多くのペットを飼育し、可愛がっているものの、不妊去勢手術をしないためにどんどん増やしてしまうという事例や「こころの病」に伴うケースもあります。ペットが「大切な家族」であり「生

きがい」という高齢者等の気持ちを理解しつつ、問題が大きくなる前に、早期に実態を把握し、介入・支援できる体制づくりが求められています。

③虐待問題への対応強化

全国で痛ましい動物殺傷事件が発生し、県内でも虐待事件が後を絶ちません。動物虐待は「100万円以下の罰金、殺傷した場合は2年以下の懲役、200万円以下の罰金」とされていますが、実際には厳しい罰が科されないため抑止につながっていません。警察の対応も鈍いと言われています。昨今では、虐待している様子を市民が動画で撮影して通報することで、早期の対応が図られているケースもありますが、いずれにせよ「動物虐待を許さない」という強い意識改革が求められています。また、諸外国にみられる「アニマルポリス」のような制度も求められます。

④悪質なペット業者・繁殖業者への規制強化、住民の意識改革

近年、悪質なペット業者による不適切なペット販売や流通が問題としてクローズアップされています。ペットをペットショップ等で買うという習慣が、不幸な命を生み出している温床とも言えます。諸外国ではペットショップ自体がありません。「命を売り買いすること」をやめなければなりません。国の法改正も急がれますが、ペットショップや繁殖業者の規制強化も必要と考えます。また、ペットを飼うなら、センターや愛護団体の譲渡会で譲り受けるという方向に、住民の意識改革も求められています。

⑤地域における理解促進・ボランティアとの連携・協働

殺処分を減らすには、今後も「地域猫」の推進が重要であり、自治体として「地域猫活動」推進と理解のための環境づくりが急務です。また、地

域猫活動をはじめ、動物愛護施策の推進のためには、ボランティアとの連携・協働が欠かせません。愛護活動に携わる方々一人ひとりに寄り添い、協働・サポートすることで、現場の声と想いを一緒に行政・議会に届けてほしいと思います。そのことが施策を押し進める原動力となります。

■おわりに

初当選以来、動物愛護の課題に取り組んできましたが、当初は議会や市民からも「犬猫なんか」という声を賜ることもしばしばでした。しかし、継続は力なりで、殺処分数の着実な減少とともに、そのような声も少しずつ聞かれなくなりました。また、他の自治体でも動物愛護施策に取り組む議員も増えてきています。昨年の議会では、ボランティアの皆さんとともに求めてきた「市動物保護指導センターの建て替え」について、ついに当局より「新施設(センターの建て替え)の検討をする」旨の答弁がありました。今後も動物愛護施策は全国で取り組むべき課題です。今度は千葉県で「殺処分ゼロ」となることが私の願いです。千葉市の取り組みが皆様の自治体での取り組みの一助となればと願わずにはられません。ともに頑張りましょう。

亀井 琢磨 プロフィール

1980年3月千葉市生まれ
早稲田大学政経学部卒
早稲田大学大学院公共経営研究科修了
2007年市議選で21票差で惜敗
2011年当選 現在2期目
行政書士・社会福祉士・精神保健福祉士・
愛玩動物飼養管理士